大人のサロン

新しい２１世紀型の生活はどうあるべきか

Life Support Company 出版事業部

第1話　はじめに

私はあるサロンに出入している。サロンといっても日本のことだから、欧米のように豪邸で政治家や企業家が集い、知識人や文化人が遊ぶといったものではない。はっきり言ってチャッチイものだ。ちょっとした店に大学の先生や文学者、あるいは音楽家や美術家といった人たちが出入して、その時々に偶然集った者たちが酒をのみながら、誰彼となく好き勝手な話をする。ただそれだけのものだ。

この読み物は、そのサロンで私が聞いた、面白い話や参考になる話を、私が皆さんにも紹介したいと思いまとめようとしたものである。まとめると言っても、私は文章力がないため、皆さんに伝えるためにはどう書けばよいものか迷っている。ルポルタージュのように書くこともできないし、小説のようにまとめることもできない。かといって私は学者でもないから、教科書のようにスッキリとした文章も書けない。ためしに日記のように時の流れの順番にまとめてもみたのだが、それもできなかった。

文章力がない私が、なぜこのような読み物を書こうと思うようになったのか、また書くハメになったのか、ことの始めから書くことにしたい。そのいきさつから書くほうが、まずは皆さんに伝えるためには早道なのだろう

と思うのだ。

ことの始めを考えると、まず思い浮かぶことが、私がその店に出入するようになったのは何故か？ということだ。思い返してみると、「そこが自分たちの都合によい地域にあったからだ」という答えが浮かぶ。

だからまず店のことから話すべきなのだろう。たしかにその店は私たちが勤める会社から離れた地域にあり、また自分たちのそれぞれの住居にも離れていて、人混みに紛れ込むほどの繁華街にあったからなのだ。しかもその店が、小道の奥まったところにあったからだろう。大きな声では言えないのだが、私たちのような人目を気にする者を入りやすくさせていたのだ。それらのことが私らがその店に出入するようになったきっかけだった。そう思うのだ。

私たちにその必要があったし、それらしい店だったから他の客も集るようになったのだろう。実は私は、そのような知識人や文化人でもなく、中堅の建設企業で資材管理を担当する重役の補佐といった仕事をしている。そんな私がその店に初めて入ったのは、同じ会社の女性社員とであった。そのときにある客が、酔った勢いで私たちにチョカイをだしてきたのだ。マスターはその酔った客の名を「〇〇先生」と呼び、私に向かって「大丈夫ですよ」といっているように笑顔を見せている。そのように先生と呼ばれていても様々な先生がある、私らの職業

のような者が「センセイ」と聞いて連想するのは、政治家や政治結社の幹部が浮び、次ぎぐらいに学校の先生を思い浮かべる。

その酔っ払い客は常連らしく、容姿に目を移せば、明らかに勤め人とは違っている。ラフで派手目なジャケツを着ているが、かと言って暴力団風には見えない。私が酔っ払いを適当にあしらうつもりで、警戒しつつも二三言葉を交わしてみると、おおよその人柄が解った。やや横柄な物言いいは酔ったせいだろうが、言葉の重ね方に知識と人格の片鱗が見える。こういう人に私たちの関係を隠そうとしても無駄だし、それらしい店に入ったがためにかえって私たちの隠し事を明かしていて、取り繕えないことも解った。ましてその人物が私たちの関係を声高にひやかし、責め立てて面白がるような人柄でないことも解った。

そんなきっかけがあって、その店の雰囲気や客相が分り、私たちの警戒心も解け気安さが生れた。その時のことは、これ以上に具体的に話す訳にはいかない。というのは、私たちのことは、そのように人目を憚る関係だから、ここで詳しく話す訳にはいかないのだ。

そのような理由で私と彼女との男女関係やその店のいちいちを、具体的に話す訳にはいかない。だが、ともかくそんな経験から、私たちが何回か足を運ぶうちに、その店の雰囲気や客相が分り徐々に神経質に隠し立てしなくてもいい気安さが生まれてきたのである。こうして、

私たちにとってその店が、警戒心なく利用しやすい店になってきたのだ。

最初のころは、私たちのことは干渉されたくなかったから、他の客や常連客達とは距離を置くようにしていたし、常連達も私たちと軽く会釈する程度で深入りしない距離を保っていてくれた。だから私たちにとって、その店が待ち合わせ場所としても都合よく、居やすいところになっていったのだ。徐々に店に出入するうち、何度も顔を合せる客がいれば会釈もするし、会釈をすれば挨拶程度の言葉も交わすようになり、待ち合わせた空き時間に常連達と話を交わす機会も生まれる。そうして徐々に私たちは常連達とも親しくなっていったが、常連達は引き続き私たちのことを黙認してくれていた。私たちもそれに習って、常連客のプライバシーに深入りせず一定の距離を守るようにもした。こうすることで私たちは自然とその店に出入りし、常連達のサロンにも自然と受け入れられるようになっていったのだ。いつしか私たちにとってその店は、食事を摂り軽くお酒なども呑みながら、気兼ねなく話ができる店となっていったのだ。

もっとハッキリという必要があるだろか。これ読む皆さんに、ことのいきさつを理解いただくためには。私がこの本を書く目的は、私たちの一々を伝えたいたのではないから、次に話す以上に私たちのことは書かないことにする。また皆さんが想像できないほど、私たちはその店に足繁く通うことになっていったから、ここでハッキ

リいうべきだろうと思う。私たちにとってその店は、待ち合わせをしたり、食事や酒などを飲み話ができるだけでなく、身体の一部だけでも触れ合うことができ、ホテルに行く前のしばらくの間、心置きなく居れる場所になっていった。私たちにとっては、知らずしらずのうち自然とそういう店となっていた。さらに足を向け、一年も経つころには、それ以上に愛を交わせる場所になっていったのだ。いいや隠し立てしないで言えば、愛というより体の一部を触れ合え、交わせる場所になっていったのだ。もちろん人の目があるから、愛撫と言えるほど明ら様なものではなく、話の合間にテーブルの下で互いの足先を触れ合わせる程度のものだ。だがそれは二人には解るし、話の合間や途中で足先に相手を感じるときに、相手を見ると、燃えるような目でにらんでいる。それが「食べた」「欲しい」と激しく求めている目だと解ると、互いの視線が絡みついて、全身の血が沸き立つ歓びを感じる。時には、互いの足を挟みあい強く締めつけ合ったりすることもあった。つまりそれが互いの身体の奥を燃やすものになっているのだ。こうしてその愛と愛撫を一つにしたようなものを、密やかに交わせる場所がその店になっていったから、そしてそれは、好き合う男女なら誰もが目指す最後のものに到達するための戯となるから、その店は欠かすことのできない場所になっていたのだ。私たちは、いつしか自然とその店を目指すようになり、そうして足繁く通うことになっていったのだ。

それが、その店に出入するようになったきっかけと、足繁く通うようになった訳で、サロンに出入りするようになる、ことの始まりであった。

次に、このような読み物を書かせるきっかけになったことを説明しなければいけないだろう。そのことも思い返せば、その店に出入するようになって数年後のあるとき、ちょうどその時分の私たちは、抜きさしならない関係になっていて、男女の問題を整理するよう迫られていた。そのような状況が、直接のきっかけなのだと思う。

会社内で秘密の男女関係を持つ者たちが、仕事にかこつけてそっとメモなどを交換するように、私したちも御多分に漏れず連絡のためのメモなどを手渡しあうこともあった。そこに愛の言葉を付け足す場合もあったし、「昨日は遅くまでお引き止めして申し訳ありません」などとあれば返辞を書いたし、「私のすべてをイヤになったことでしょう」などと質問されれば、長めの文章を書くことにもなった。そのようなメモや手紙でのやりとりは、歳不相応な気恥ずかしさを感じさせつつも、そのような形の気恥ずかしさが、かえって秘密の男女関係を二人だけの世界にも引きずり込んだりした。さらにメモや手紙にあるその恥ずかしさが、若さと身体を掻き立てるものにもなっていた。

これも御多分に漏れないことだが、それらのことを

徐々に妻に知られることになり、私たちの男女問題を整理するよう迫られるようになった、そういう時期だったのだ。そう迫られるようになるにつれ、二人の間にあった甘いものは消え、現実の重さが加わってきて、精神的な負荷を伴う愛くるしいものへとかわっていった。別れ話をしようと二人で逢えば、かえってただ互いを求めるばかりになり、話足りないことになる。そうして話足りないことを手紙に書くようにもなっていった。あるいは些細なことで口論したりすると、言い訳を手紙に書いたりもする。そのような手紙のやりとりは青臭く年不相応で現実味のないことに思えてしまうだろうが、実際にそのような立場になれば分かるのだが、歳相応に彼女と妻に対する責任を理解するからこそ、問題を整理する必要がでてきて、反対に頭のなかを整理するために、物を書かなければならないようになってくるのだ。彼女との清算を一段と迫られてくると、私自身としても彼女と妻との間で悩んでいる問題を、やや長めの文章に整理して考えをまとめるようにもした。さらに彼女と二人の間では、互いに自分の気持や考えを整理するために手紙をやりとりしたり、あれやこれやと話し合ったりもした。そうして、自分たちの関係や問題を整理することになっていったのだ。

問題を自分の中で整理し二人で話し合っていると、フッと気付けば、サロンで聞いたA先生やB先生や小説家のCたちが言った言葉や話しが、二人の会話に自然に出

てくるのだ。「A先生はこう言っていた」「B先生の話からすれば」と自然に話に出てくる。そうして改めて考えれば、サロンで交わされる話題のどれもこれもが、実は男女の問題で、それが自分たちの問題でもあったのである。だからこそ思い返せば、サロンでの話に興味が涌き面白くもありためになる話にもなっていたのだ。そのことに二人で気付き、サロンで聞いた男と女の問題の、面白くためになる話を、自分たちの問題として再度思い返しながら、私と彼女なりに話し合い整理して考えることになっていった訳だ。だから私たちが話したいこの本の内容や話を括れば「男女の問題の話」ということになる。が、それはなにも難しい話ではなく、皆さんに解ってもらうためにハッキリ言えば、先生達が話すエッチ話に私たち二人が焚きつけられたり、あるいは先生達が話す愛の姿に賛同し、身体を熱くしたこと、そうして自分たちが求めあっているものを確認したり、性と愛や生活を考えてみることになっていったということなのだ。また互いの家庭の不和も重なっているから、それらも話として括って、男女の問題を整理して考えることになったと言っているのだ。

こうして私たちの男女問題を整理するために、サロンの話をまとめてみると、人の話をまとめるということは、なかなか難しいものであることを知った。サロンでの話を思い返してみると、男女問題の話とはいえ、人の話と

いうものは、話す方もまたそれを聞く側も、かなりあやふやな点があるものなのだ。私たちは、あやふやな点があると、機会あるたびに何気なく各先生に質問する形で確認するようにしていった。そうして徐々に問題や悩みの整理を進めてきたのだ。あるとき、ある先生に確認したときに、その先生は私の手元のメモを見て、「簡単なメモでも組立ててみないと問題は整理できないものだ」と教えてくれた。そうしてなんとか組立てて繋りのあるものにできた頃になると、さらに「話を煮詰めるためには、組立てたものを本にでもするつもりで再度整理しないと、問題を把握することはできない」と教えてくれたのだ。さらに先生は、そのようにして性と愛の問題に解答を見つけることは、「他の男女の悩みや問題にも多少でも関係するはずだから」とも言い、一応は本にするつもりで整理してみることだと教えてくれたのだ。今振り返ると先生の教えと指導のとおり、男女の問題を整理するとはそういうことだ、としみじみ納得するのだ。そのような経過が、私にこのような読み物を書かせるいきさつだったのである。

ここまでに私達が店とサロンに出入するようになったきっかけや、メモから本にするつもりになったいきさつを手短に話したが、私に文章力がないことをわかっているから、皆さんにうまく伝わるか不安がある。「恋愛ゴッ

コに時間を費やせる『歳相応』な男や女が居るわけがない」とか、「そんなサロンなど在るはずがない」と言われてしまえば、話を解ってもらえず話は始まらないだろう。だが、大変申し訳ないことだが、これ以上私と彼女とのことは、具体的に話す訳にはいかないのだ。というのも、私たちのことは、そのように人目を憚る関係だからだ。もし話せるとしたら、またその必要があるとしたら、次のことぐらいだろう。私と彼女の一般的な概略とその「つながり」の性質というようなものだ。ことは、ある金融機関が私が勤める会社の建て直しを名目にして、何人かの幹部と職員を送り込んできたことから始まったのである。それが私と彼女が知り合う切欠だった。私はそのために閑職に追われてしまった側で、彼女はその金融機関の幹部に付き添って来た側であった。彼女は、私と幹部の連絡や調整役という名目の私の監視役なのだ。「監視役がなぜ」と問われれば、彼女がいうには「職業柄の違い」だそうだ。彼女がいうには金融機関ではすべてが細かく、細心の注意を必要とするし、客への言葉使いも丁寧であることが要求される。だから銀行は女性的な仕事だという。ところが彼女は、私らの建設という職業は男性的で、連絡調整役で取り継いでいるうちそれを感じ、また知り、女性的で陰湿なものが嫌になったのだという。

　これ以上私らのことは話すわけにはいかない。私たちの身の回りにいる誰かがこれを読めば、私と彼女が誰かわかってしまい、会社や両方の家族にまで迷惑が及んで

しまうのだ。そのような理由で私たちのことは、勘弁して欲しいのである。

なによりもこれ以上説明すれば、私たちだけでなくその店やサロンのメンバーの姿も浮かび上がってしまい、皆さんにまで迷惑が及んでしまうだろうから、店やサロンや私達の具体的なことは書けないのである。これは私たちが幾度かその店に出入するなかで徐々に分かったことだが、ほかの常連客達の中にも、私たちと同じようなカップルもいる様子で、女友達や男友達を連れてきているから、そのようなプライバシーに関わることを、私たちの事を話すことで、ここで明かしてしまうことになってはいけないし、また客同士の関係も定かでないのに、私が決め付けて話す訳にはいかないのだ。経済学の先生と家政学の先生が一緒にきたり、後で分かればそれが恋人同士だったり、あるいは教授と助教授だと言われる人が師弟や親友と呼ぶ域を越えているようでもあったりするから、そのようなプライバシーに触れることを書くことはできないのだ。またそもそもこれを書いている目的は、店のいちいちやサロンの様子やメンバーの人柄や男女関係などを具体的に話すことではなく、ただサロンで聞いた大学の先生や芸術家たちの、面白くためになる話を皆さんにも紹介したいだけなのである。

次に話しておかなければならないのは、サロンについ

てだ。チョトした人の集まりを横行にサロンと呼ぶ訳について説明しなければならないだろう。またそのような店やサロンは、皆さんの身の回りに多くないだろうから、これから話すサロンの話の様子を分かってもらうためにも、サロンのだいたいを説明しなければならない。

その店は、大人たちが遊ぶのに好都合な店だから、料金は普通より割高なのだが、そのためもあって、いつも適度な混み具合になっている。そのような常連達にとって安心でき、居やすい店がどのようにしてできたのか、またその店に誰が誰を誘い始め、サロンと言えるような雰囲気ができたのか、そのいきさつを実は私は知らないのだ。

私が想像するには、その店は立地条件に恵まれて、幹線の駅に近くにあり、その駅は近隣にある大企業の支社や大学などを結ぶ中継点となる地理的な位置にある。しかも駅周辺が適度な繁華街となっていて、さらにその店が小道の奥まったところにあり、人目を気にする大学の先生などが入りやすい店だったからだろう。ここで酒を飲み息抜きをして最終電車で帰る人ともいるし、こちらで一泊して早朝それぞれの家なり勤め先へと向かう人もいる。こうして哲学・経済学・工学・医学・家政学といった、大学教授だとかが出入するようになり、そういった先生達が仲間を誘い、その店を出版社や編集者との打ち合わせにも使ったりして、先生達がいう「本屋」も出入することになったのだろう。さらに先生や本屋がジャ

ーナリストや写真家や絵描や彫刻家を誘い、芸術家同士がバイオリニストとかピアノ弾きとかの音楽家誘い、また編集者が、小説家や文筆家を誘って、知識人や文化人が集るようになってきたのだろう。ときにはそういった人が、モデルやダンサー・演劇人・芸能人と同伴している時もあった。まれに私のような場違いな職業や、特異な人物も突然店に入ってきて、混ざったりする。そのようにして人々が集ってきたのだろうと、想像するのだ。

だが、そのようにただ人が集ればサロンになるのではないだろう。その店の雰囲気やサロンは、どのようにして出来たのだろうか。ただ単に、酒が飲める店があって、知識人が集まり人が集ればサロンの雰囲気うまれるわけではないだろう。私が考えるに、普通の酒場や呑み屋とこの店が違うのは、なによりも話し合いができる点にあるに違いないのだ。

普通に考えると、話し合いはどの呑み屋ででもできると思うだろうが、よく考え直してみればそれが違うのだ。私も当初は漠然とそう考えていたが、サロンに出入するようになって、また本にするつもりでまとめようと考えると、そうではないことを知ったのだ。

たしかに、どこの店でも客同士の話し合いというものが生まれるし、そうある。そのことは私も否定しない。話し合いはたしかにあり、どこでも同じように話す側に回れば必ず自分のことを話したりするものだし、聞く側

に回れば、話し手の身の回りで起きた出来事や、考えといったものを聞いたりするものだろう。それが普通の話し合いというものだ。こうして話し合いが深まれば、互いのプライバシーに深入りすることがおきてしまう。相手がジャイアンツが好きだ、ドラゴンズのファンだと分かれば、「なぜ好きか」と個人の気持や考えを聞き、「いつから、どうファンになってきたのか、熱の入れようは」と個人の経歴や感情の度合いまで聞いてくる。出身地を聞けば「生まれも育ちも関東の人が、どうしてドラゴンズのファンになったのか」などと聞く、そうして他人の経歴や生活を知り、また本人が応え話すことになる。「ドラゴンズの試合になかなか応援にいけない」などという悩みや至らない点を知れば、「俺がいうように仕事を早く片付ければ、野球場に応援にいけるはずだ」と教えを垂れたり説教したりもする。時には意見をされたり干渉じみた体験をさせられることにもなるのである。

話し合いというものがプライバシーの教えあいで、干渉し合うことだと言っても間違いないほど、話し合えばプライバシーに深入りし合うものなのだ。どこの呑み屋でも、どこででも人と多少の関わりを持てば、話し合いが生れ、話せば自分と自分の考えを話し、聞けば相手のプライバシーを知ることになる。酒に酔ってくればなおさらに、互いに深入りしあい、干渉がましいことが起きてしまうものなのだ。

こうして干渉されれば誰でも不快だから喧嘩になった

りもする。話し合いというものがそういう煩わしいものだからこそ、人々は話し合いを避けるのだ。だから普通の酒場や呑み屋では、当り障りのない天気や気候のことなどを話し、誰でもが知っているニュースを話す。それも好き嫌いや考えがはっきり別れる政治などの話は避け、話し合ってもらちもない交通事故や事件や、スポーツや芸能ゴシップなどを話すことになるのだ。たまにはその最後に自分の感想や考えを少し加えたりもするのだが、その自分の感想や考えだとしているものでさえ、新聞や週刊誌だとかに載った意見の一部であったり、あるいはテレビの論説や論評で聞いた一部であったりするのだから、多くは自分の考えではない。よく考えれば、それらはマスコミ情報の伝達、交換、確認であって、自分たちのことを自分の言葉で話し合っているのではないのだ。

だから一見すると普通の酒場でも話はあるし、人が集れば話し合いがあるように見えるのだが、実は話し合ってはいない。だから、互いにそれ以上に深く関わらず、プライバシーに干渉されることも少ないのだ。反対に話し合うべき話し合いをすれば、プライバシーを干渉され、干渉する。また互いのプライバシーを多少知っている友人と店に来て話しても、その話が当り障りのない芸能ゴシップやたわいない話でも、うるさい音楽に負けないような大声で話すから、そのような状態を周りで見ている者は、話でも盛り上がっているように見えるだけで、当人同士は実は話し合うべき話し合いはできず、騒しさだ

けが残るのだ。

そういうわけで、この店のサロンでも、人々はプライバシーに深入りし合っている。ところがここでは、話ができ話し合いができるのだ。つまりこのサロンと普通の店が違う点は、このサロンにはプライバシーに深入りしない歯止めがあり、普通の店にはその歯止めがないということだ。プライバシーに深入りされることは二人の間での話し合いでは避けられないことで、もう一人周りでそれを諌める者がいるかいないかで歯止めがあるか無いかが決まる。諌める第３者がいないと、歯止めが効かず互い深入りしてしまうのだ。実際の話し合いの場面でも、プライバシーに深入りする者と深入りされる者に分かれるが、たいてい常識ある者が深入りされる側で、意に会さない側が深入りをする。だから、周りで諌める者がいなければ、常識ある者が去り意に会さない者が留まることになってしまい、そうしてプライバシーに深入りしないルールはいつまでも作られなくなっている。またそうして話し合いができない状況となり、人間関係が煩わしくなっているのだ。

つまりこのサロンでは、プライバシーに深入りされれば、周りの第三者が諌め歯止めをしてくれているのだ。しかもそれが、互いに何気なく守っているのではない。常識だと黙っていては歯止めにならないことを皆が知っていて、実際に「深入りだ」「言い過ぎだ」「それを言っちゃあオシマイよ」と言っている。誰でもプライバシー

に深入りされれば不快だから、自分では深入りしないようにするが、普通の店では他人を諌めことまではしないのだ。ここのサロンでは黙っていては歯止めにならないことを皆が自覚していて、当然なことのように実際に言い、あるいは諌める勘所を理解していて、互いを諌めている。そうして互いが周で諌める者となるから、歯止めが効き、プライバシーが守られ話し合いができる状態が維持されているのだ。時には険悪な状態に落ちいろうとしていても、それを基に周りが様々に諌めるから良い雰囲気が生れるのだ。だから諌める意義を理解し実際に言えて、始めて身に付いた常識と言えるし、そうなっているからこそ話し合いもできるのだ。

さすが知識人や文化人で、このサロンでは第三者の誰もが守るべきそのような話し合いのルールを理解し、当然の常識となって話し合いが成立している。その上に一人一人が話術を持っていて、プライバシーに関わる内容や触れられたくない話になったときは、「話は変るが」と言って話を換わす術（すべ）を持っている。また学問や芸術などの話は、私のような門外漢には一般の話として語ってくれるが、同業種の先生や文化人同士のあまりにも深い話はしないようにしているようなのだ。そのような空気を察知すると、普通の話、脈絡のない話へと戻る。最初のころ、私はそれが解らず、皆の興味が集っていた話が、突然終わったり話が移たりして、フに落ちない違和感をもったものだ。またサロンで遊び月日を過ごすうち、互

いの職業や社会的な地位も分かることもあるが、分かっていても互いがそれを言わず、プライバシーには深入りしないのだった。例えば一般には、出身地などのプライバシーを知れば、裏に回って「あいつは関東出身者だというから乱暴だ」とか根も葉もないことを付け足し、言いふらして人格を傷つけて陥れようとする者がいるものだ。回りもその話を聞きホイホイと口車に乗せられて、何かいけない物を見たように勘違いして、いじめたり排除する側に着いたりするものだ。ところがこのサロンでは、他人のプライバシーを知っていても噂で悪用したり、それを材料に陥れるようなことはしない。互いが流言に惑わされたりしない理性や合理性を持っているし、そうしないことを表すために、プライバシーを知ってもそれを言いはしない。私もそういう意味でもこの本で、先生達のプライバシーに関わることは書きたくないのだ。さらに知識人や文化人とはいえ、酔の深さによって支離滅裂な話や乱暴な話になるときもある。とくに人々の一般には、そのような人物は文化人の方に多いと思うだろうが、現実は決してそうとばかりは言えず、ある先生などは学者にありがちな痩せて華奢な体格なのに、酔うと自分のことを「テメエは」と言い、もっと酔いが回ると相手まで「テメエラ」になり、わざわざ「バカヤロー」だとかの乱暴な言い方をしたがる。酔いが回ると「バカヤロー」を、ロレツが回らない振をして巻舌で「バロー」と言ったりする。日頃学問に対して真面目であり常に慎

重を心掛けているためだろうが、その反動として遊び半分ふざけ半分に、わざわざ乱暴な物言いをしたがるのだ。周りもそれを解るから気にも止めず許容している。私も職業柄身の回りに乱暴な言い方しかできない者もいるから、なんとも思わない。そのような話し合いの術や許容力も、サロンらしい穏やかな雰囲気を保つためにきっと必要なのではないだろうか。

こうして話し合いの常識とルールが守られ、それによって話し合いの術や許容力が生まれサロンとその雰囲気がある。だからサロンと言っても普通の呑み屋と違うのは、穏やかな雰囲気が保たれて話し合いができる点だけで他に変りはない。例えば、どの呑み屋でもどこの世界でも人が集れば、変り者と言われたり特異と思われる人物はいるものだ。ところが、私たちの身の周り一般では、特異な人物を毛嫌いするのが普通で、乱暴な言い方や乱暴なことをいう者や、常識を知らない者や、変り者などとなれば話も聞かないこともある。それが普通になっていて、また当然なこともあるのだろうが、そうして人間関係が繊細になり煩わしさを増している。また島国根性の悲しい性（さが）で、村八分意識が生きていて、了見が狭く許容力もなくなるし、誰もが退け者にされないよう異論や特異を慎むようにするから、小さくまとまった人物ばかりとなる。そういう弊害がある。だがこのサロンでは、異論や変り者や特異な人物を毛嫌いしたり無視するということはない。ここでも実際に変り者と言われ特異な人

物も居るし、人の反対を言いたがる偏屈や、オチャラケやお調子者もいるし、おふざけやイタズラもある。文化人や知識人だから、そう言った人はむしろ多いいのかもしれない。家政学と音楽家の女先生や心理学の教授と助教授が同性愛という普通でない特異さもあるし、またそれを憚らずいうような常識のない変わった人物もいるのだ。もっともそれは見方によればの話で、私の職業なども見方によれば、知識人や文化人とは離れた職業だから特異だし、さらに私のような者が知識人や文化人が集るサロンに出入するのも特異で変人とも言える。悪意があればいくらでも、特異な点や普通ではない変な点をあげつらうことができるのだ。だが知識人や文化人は、私らのような勤め人のことや実態を知らないから、私の仕事中心の話も面白がって耳を傾け、私たちも許容し受け入れているわけだ。そういった分別を計れるから、つまり分と別の違いを計れるから、余裕が生れ、人物を特異だとか変り者だとか決めつけず、また話を無視したり人を排除するようなことはしないのだ。私も先程いったように職業柄、乱暴な言い方しかできない者や、強情者や偏屈や特異な者などが身の回りにいるし、それを排除したり話を無視していたら仕事にならないから、職業柄自然に身についている。るといっても、なにも先生達のような高尚な考えがあって身についたものではなく、偶然身についていただけで、要は職人の言い方が乱暴でも偏屈でも、仕事が立派にできれば実害はないからなのだ。ま

たそのような者に限って卓越した技を持っていることが多く、頭を下げてでもやってもらわなければならない職人仕事があったりする。そういう目先のことや実利性で、変わり者などを許容する習慣が身についているだけなのだ。

普通の呑み屋とサロンが違う点はこれくらいのものだろう。穏やかな雰囲気が保たれている点だけで、まったく他に普通の呑み屋と変りはない。話し合われる話の内容も同じで変りはない。小説家と絵描きや、先生と本屋が仕事の話をしていたり、酔ってくれば男女の話や、時にはきわどいエロ話にもなる。冗談や嘘話もあるし、脈絡のない話も多く、政治の話が茶番劇だという話になり、演劇から芸能人の話へと移るようなことにもなる。とはいっても知識人や文化人だから、ときには知的な話題も出るし、脈絡のない話やエロ話だといっても、趣むきがあったりもする。もちろん面白くためになる知識や文化の話を聞くこともある。もっともためになる話と言っても、話す方も聞く方も酔っているのだから、まともに信じられる話ばかりともいえない。さらに混み入った話や議論になるときもある。議論が白熱して批判や非難するような話になるときもある。だがそうなっても、それが間違いを指摘して道理を求める話や批判なのか、個人の人格を傷つける目的の人格攻撃の話や非難なのか、互いが分別を計る力を持っている。分別を計れるから、個人の人格を傷つける目的の話や非難ならば、人格攻撃する

者を周りが諌め、人格を傷つけられ非難されている側を養護する。だからこのサロンのたいがいの白熱した議論は、意見の違う点を確認して、それぞれ「勉強してみよう」とか「研究しよう」といって終わることが多く、後日思い出したようにその話の続きがあったりする。一般には、その分別を計る力がないため、いさめ所を勘違いする者がいて、白熱した話を嫌って道理を求める側を諌め、人の話を無視して黙んまりを決め込む者を常識人だとする。そうした者が、裏に回っては口軽く個人のプライバシーや人格を傷つけ回ったりする。こうした一般関係やそうした者によって、話し合いができず人が集まらない状態を作ってしまう場合が多いのだ。

こうして普通の店と同じ点と違う点もあるのだが、その両方が揃うからこそ穏やかさや和やかさ、朗らかさといった雰囲気が生れ、余裕が保たれているし、いかなる話や意見も許容できるのだ。ヨーロッパの豪華なサロンでも、サロンと言えるには、特異な人格や様々な人物がいて、多様な意見があり様々な話があるからで、またその意見や主義主張を聞けるようになっているからだ。つまりこうして、自由に話し合えるように素地があるからなのだ。またそうできるのは、皆が話し合いのルールを理解して常識となっていて、それが習慣となって守られているからだ。だから自由に穏やかに話し合えるサロンと言えるのだし、この店でも同じように互いに深入りしないのだが、かといって無関心でもなく、ザックバラン

に話し合いができる状態になっているからサロンと言えるのだ。またそうして知識人や文化人が集り、大人が遊ぶサロンになっているから、メンバーたちはサロンと呼んでいるのである。

さて、これでサロンの有様も説明できただろうか。これから皆さんに、サロンで聞いた男女の面白くためになる話を紹介していくのだが、皆さんの理解を得るためには、もう一つ説明して置く必要がある。先に実際のサロンの話や話題をまとめることが難しいと話したが、再度誤解のないようにしておきたい。サロンの話し合いの様子を実際のまま書き写すことは難しく、どうしても手を加えたものになることを了解願いたいのだ。

人の話というものは、内容をまとめてはいない。それが男女の話であれ他の話であれ、難しい話かどうか関係なく、実際の人の話というものが、意味や内容をまとめて話しているわけではないから、まとめるのが難しいのだ。話がまとまった意味を持っているなら、そのまま書けばよいことだろうが、実際の話と言うものがそうではないからまとめるのが難しいのだ。実際のサロンの話は、それが大学の先生の話でさえも、一般の話と同様に、テーマや意味や結論といったある程度のまとまりさえない場合の方が多い。また実際の話というものは脈絡なく取

り交されているもので、プロ野球とかサッカーといったスポーツの話題が、勝敗や競争の話となり、会社の勝ち組負け組や競争の話へと移り、仕事でのリストラで生き残り競争の話、受験競争の話、戦争の話へと移り変わる。再度プロ野球とかサッカーの話へと戻る。そういったものが実際の話題といわれるものだ。さらにまた、実際の話題は数人の話が混ざりあって話題となっている。ためになる話や意味のあるもっともな話は、たちまち誰もが受け入れて、自分の意見かのように話、誰の意見だったか特定することはできないほど混ぜてしまうのだ。また誰もが興味を抱く面白い話というものも、同じように誰もが真似て口にする。さらにもう一方の面白い話というものも、漫才のように人の話を別な者が受けて、話のキャッチボールで面白くなっているものだ。こうして数人の話が混ざって話題となり面白くなっているから、実際の話題や話をまとめることは非常に難しい。時にはいい話だったと思い返してみれば、２～３年の間に聞いた数人の話が混ざっていたり、しかも異なる話題が私の頭の中で混ざりあったり、あるいは常連客やマスターが他の人が話したかのように組み合わせて、話や話題に意味や面白味を持つ場合もある。しかもサロンにはメンバーが毎回一同に集っているわけではなく、先生の中には、この辺りの大学まで出張講師で来る先生もいて、それに合せてその店を利用するため、何カ月も会わない場合もあるのだ。そうやってメンバーがその日その津度代わるか

ら、誰がいつ何処まで言った話か思い返すことも難しいしことだし、話題に分けたり整理することも難しい。

加えて、そもそも文章にするということ自体が、読みやすくするために女言葉を男言葉に置き換えたり、話し言葉を文章言葉に替えたりしなければならないことだ。また実際のサロンでは、酔いが回ると、乱暴な言い方をしたがる人物がいるように、かえって下品な言葉や汚い言葉を言いたがる人もいるし、男女蔑視の言葉もあるから、そのまま書くわけにもいかない。あるいは本当のことだといっても、事実を言えば角が立ということもある。いくら実際の姿だといわれても、見たくもないことを見せられれば、暗い気持や不愉快にさせられることもある。そういったこともあるから、そのまま書くことはできないのだ。また先生たちがよく使う「～と思う。」「～ではないか」「～とも言える」「だとするなら」「そういうことが許されるなら次のような推論も成り立つ」とかの、断定を避けた慎重な言い回しも、そのまま書き写せば何を言いたいのか分からないものになってしまう。つまり、だから、実際の話や話題というものがそのようなものだし、また書き写すということがそのようなものだから、どうしても手を加え加工したものになるのだ。しかも私が聞いたり理解したり想像できる範囲で、手を加えるものとなることを、予め了解願いたいということだ。

ところが、そう了解してもらっても、私自身は小説家でも学者でもないから、上手く文章が書けない。小説の

ように身の回りの様子などを細々と書き現すこともできない。ルポルタージュのように事実を書き表し、その中から的確に普遍性をつかみ表現することもできない。教科書のようなスッキリとした文章も書けない。私それらどのようにも書けないのだが、どちらかといえば小説などの飾りつけた文章は女性的で体に纏わり付くようで好きになれず、教科書の文章の方が、清潔で美しい文章だと思っている。嘘がなく意味を明瞭にするため無駄もないかわりに余韻もない、サッパリとした男らしい文章で、私はそういう清潔なものを、美しいと思い密かに憧れているがそれもできない。したがって、できるならそういう文書を書きたいと常日ごろから思っている者が、しかも小説のように書くことが嫌いでその力もない者が、無理して小説のようにまとめようとすれば、面白くためになる話も説得力がなく、これを書く意味さえ失ってしまう。かといって学者でもないからサッパリとした文章を書くこともできなかったし、あげくの果てに意味が分かれればいいのだからと、日記のように時の流れの順番にまとめようと試してもみたのだが、サロンでの話は時系列に並べられずに混ざりあったものだから、日記のように書くこともできなかった。

本にしようとやってみて、始めてそれらの難しさを知ったのだが、実は私は、それらの文章を云々する以前の段階だったのだ。まして本にしようなどとは夢のまた夢であったのである。というのは、そもそも考えて見れば、

誰でもが、男女の問題を経験していて知っているはずなのだが、そこから生まれる問題を整理できず、誰でもが悩んでいるのである。男女の問題を文章にするだけだとはいっても、私たち二人のことでさえ、自分の気持も整理できないから悩んでいるのだし、悩んでいるように自分たちのことさえ整理できていないのだ。そのように整理できていないからこそ、皆さんに判りやすい文章にすることができないのだ。また私自身が、そのように交わされた話題を、これはＳＥＸの話、性教育の話、生活や家庭と家族の話、あれは受験競争の話、これは受験戦争の話、あれは戦争の話という具合に、判断できるほどの知識がないのだ。そのように話題別に分けてまとめるといっても、知識がないため話をどのようにして割り振り分けてまとめるのが妥当かが、私にはその境目が解らない。つまり分けられるほどの知識がないから、違いが分からず仕分けができないのだ。分け方もまとめ方も解らないのだ。あるいは、なるほどためになる話や言葉だと思っても、それが故事来歴なのか四字熟語なのか、はたまた諺なのか訓話というものかさえも判断できない。それほど知識がないから書けない。しかも、それを分かり易い実際の出来事としてまとめられないのだ。

力がない私が、なんとか文章にできたのは、彼女とある常連客たちと「ある先生の」協力があったからだ。特に先生の協力と知識を借りたからできたのだが、それができたのは、次のような条件で了解してもらえたからだ。

1、メンバーの実名や勤務先を書かないこと、
2、サロンでの話は誇張がふくまれ、学問の立場とは違う。
3、内容は話をした本人以外正しく書き写すことはできないから、
4、話内容の真偽を問題にせず飽くまでも参考であること、
5、そのことを予め読者に明らかにすること

などという条件だ。従ってここにもそれを書き写し、示して置くことにした。また協力や知識を借りたといっても、先にも話したように下品な言葉だとか、周りくどかったり、腹が立つ内容や、食い違いもあるかもしれないのは一重に私に文章力ないためで、「ある先生」や彼女の責任ではない。サロンの話を収まりがいいように、私がうまく取り扱えないからなのだ。このことも含めて、皆さんには予め了解してもらいたい。

そんなこんなで、実際の姿を写したり、実際の話を皆さんに紹介するのは難しいが、皆さんにもサロンの精神を持ってもらい、腹を立てる話にもなるからこそ私たちの参考になるのだと考えてもらい、多少のことは許してもらいたい。最後まで読んで頂ければ、先生や芸術家たちの生の声や本心を聞くことができて、本の代金以上の意味となることを理解してもらえるはずと思うのだ。